

旧約から継承した教会理解 ―「エクレシア」の用例から¹⁾

矢 田 洋 子

1. はじめに

旧約聖書には、「神の民イスラエル」の歴史を通して働かれた神の業が証言されている。神はアブラハムの子孫であるイスラエル民族を選び、救いの体験を与え、契約を結んで「神の民」とし、契約を守るよう神の民を導く。そして、新約聖書は幾つもの箇所、キリストを信じる自分たちこそが、本当の意味でアブラハムの契約を継承し、出エジプトの救いを受け継ぐ、まことの神の民であると語っている²⁾。

旧約の「神の民」は、「キリストの民」としてまことの神の民となった。それに伴って、旧約と新約の間には連続と非連続がある。では、教会理解に関しては、新約は旧約から何を受け継いだのだろうか。旧約聖書が神の民に関して描く様々な性格の中で、聖書が証言する教会の不可欠要素は何だろうか。本報告の目的は、「エクレシア（教会）」という言葉遣いを通してそれを再確認することにある。

2. 新約の「エクレシア」と旧約聖書

「教会」は、新約聖書のギリシア語「エクレシア ἐκκλησία」の訳語である。新約に全114箇所³⁾ある「エクレシア」のうち109箇所は、イエス・キリストを

信じる信仰・礼拝共同体／集会／会衆の意味で用いられ、「教会」と訳されている。

新約聖書でのこのような「エクレシア」の用法は、ギリシア語として一般的ではなかったことは興味深い。ヘレニズム世界で「エクレシア」とは、第一にギリシアの都市国家の議会を指し、政治的／社会的な集会を意味する語であった⁴⁾。新約聖書でも、エフェソの町というヘレニズム世界での定期的な正式の「会議」（使19:39）と不定期の議論「集会」（使19:32,40）に対して「エクレシア」が用いられている。新約聖書は、ヘレニズム世界の「エクレシア」の一般的理解を知っていながら、その用例は3箇所のみ（2.5%）であって、大部分（96%）は「教会」を意味して用いられている。新約時代のキリスト者たちが自らを好んで「エクレシア」と表現したのには、それなりの理由があったはずである。Bauerは、エクレシアという語がギリシア語圏のキリスト者の間で一般に普及するようになった理由を2つ挙げている⁵⁾。

一つには、ヘレニズム世界でお馴染みの「エクレシア（政治的会議／議論集会）」という語を用いることで、ローマ社会に対してイメージ向上を図ろうとした可能性である。Bauerは、「キリスト者は治安を乱す集団だという疑惑を鎮めるため」⁶⁾と記している。ただし、新約の文書はどれもキリスト者（共同体）に向けて書かれたものなので、そこに記した「エクレシア（教会）」という自分たちの呼び名の選択の主な理由が、対外的なイメージ戦略だったとは考えづらい。

より説得的なもう一つの理由は、旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）では「エクレシア」が、神の民イスラエルの宗教的集会や会衆を意味するヘブライ語「カーハール קהל」の訳語として用いられていることに関係する。Bauerは、「ヘブライ語聖書のギリシア語訳に出現する用語を使用することを通して、イスラエルとの連続性を確認するため」⁷⁾と記している。新約時代の「教会」は、神の民イスラエルの、特に七十人訳が語る「エクレシア」の性格を継承しているという自己理解を持っていたに違いない。

新約聖書の「エクレシア」の全用例114箇所中、「教会」でも「議會／議論

集会」でもない残りの2箇所は、旧約聖書に描かれたイスラエルの「宗教的集会」を意味している。そのうち1箇所は、ステファノの説教の中で、イスラエルの民が十戒を受け取ったシナイ契約の出来事をエクレシアの出来事として、「(モーセが) 荒れ野のエクレシア (集会) において、シナイ山で…生ける言葉を授かり、私たちに伝えてくれた」(使7:38)と表現している。これは、十戒を授かった日を「エクレシア (集会) の日」(申4:10, 9:10, 18:16)⁸⁾と語る申命記の七十人訳の表現に由来しているに違いない。

もう1箇所は、主なる神を信じる当時の誰もが祭儀やシナゴグ礼拝で口にしていただろう詩編の言葉の引用である。ヘブライ人への手紙は、イエス・キリストが私たち人間を「兄弟」と呼んでくださる根拠として、「私は兄弟たちにあなたの名を告げ知らせ／語り伝え、エクレシア (集会) の中であなたを賛美しよう」(ヘブ2:12; 詩22:23)⁹⁾とイエスは言われた、と語っている。同じ「エクレシア」という語によって、旧約のイスラエルの民が十戒という御言葉を授かった集会と日々の主を賛美する祭儀／礼拝が、キリスト教会と強く結びつけられている。

もちろん、新約時代のキリスト教会が自らの呼び名として「エクレシア」を選んだ決定的な理由が、七十人訳が描く「エクレシア」の性格を継承しているという自己理解にあったとは言い切れない。しかし、旧約聖書が「聖書」として大切にされていたことは確かであるし、パウロは、旧約聖書に精通していたのである。少なくともパウロを中心とした新約時代のキリスト教会は、「エクレシア」という表現を通して、旧約聖書の描く「エクレシア」の主要な性格を教会に不可欠な要素と受け止めていたことは確かであろう。

3. 七十人訳の「エクレシア」

七十人訳のギリシア語「エクレシア ἐκκλησία」は、旧約正典の範囲内に、申命記に9箇所、ヨシュア記に1箇所、士師記3箇所、サムエル記上2箇所、列王記上4箇所、ミカ書1箇所、ヨエル書1箇所、詩編10箇所、ヨブ記1箇所、箴言1箇

所、哀歌1箇所、エズラ記5箇所、ネヘミヤ記6箇所、歴代誌上8箇所、歴代誌下24箇所の合計77箇所¹⁰⁾に用いられている。

七十人訳の「エクレシア」の中心的意味とその意味範囲を明らかにするために、まず、これらの全用例77箇所を意味ごとに整理したものを、以下に示す。

七十人訳の「エクレシア」とは—

イスラエルの集会／会衆

- ①**祭儀礼拝の会衆**（23箇所）；ソロモンの神殿奉獻の祭儀（王上8:14,22,55,65; 代下6:3,3,12,13; 7:8）、ヒゼキヤの主の神殿の清めの祭儀（代下29:23,28,31,32; 30:13,17,23,24,25,25）、聖なる高台でのソロモンの祭儀（代下1:3,5）の会衆。ヨエル書で聖別を促される「会衆」（ヨエ2:16）と、哀歌で、異国の民が加わってはならないと語られる「あなたのエクレシア（集会）」（哀1:10）は、「聖なる集い」「祭司」「聖所」と共に語られていることから、祭儀礼拝とその会衆見て、ここに含める。
- ②**主の賛美や主への祈りを中心とする礼拝とそこに集う会衆**（14箇所）；主を賛美する礼拝（詩22:23,26; 26:12; 35:18; 40:10; 68:27; 107:32; 149:1）。また、神殿建築準備後のダビデの祈り（代上29:10,20,20）、主の神殿の新しい庭でヨシャファトと共に主の助けを求める（代下20:5,14）、神殿の前でエズラと共に泣く（エズ10:1）礼拝の会衆。
- ③**御言葉／律法を受け取り応答する宗教的集会**（3箇所）；申命記の「エクレシア（集会）の日」（申4:10; 9:10; 18:16）は、イスラエルの民がホレブで十戒を授けられた集会の日を指している。出エジプト記19章によれば、モーセを通して十戒を授かった時、イスラエルの民は皆、聖別をもってシナイ山のふもとに集っていた。
- ④**御言葉／律法を聞く宗教的集会の会衆**（4箇所）；「イスラエルの全エクレシア（会衆）」は集まって、モーセが最後に伝える御言葉「モーセの歌」（申31:30）を聞き、エバル山でのヨシュアによる律法朗読（ヨシュ 8:35）を聞いている。また、エズラは律法を広場に集まった「エクレシア（会衆）」の

前に携えて来て（ネヘ8:2）それを読み上げる集会を開催し、二日目には「捕囚から帰還した人々から成るエクレシア（会衆）」（ネヘ8:17）は、皆で仮庵を作り、毎日律法朗読を行う仮庵祭を行っている。

- ⑤**宗教的重要事項の決定のための集会の会衆**（8箇所）；神の箱を迎えに行く件（代上13:2,4）についても、神殿建築の予定（代上28:2,8; 29:1）についても、集会においてダビデが「全エクレシア（会衆）」に語り、「会衆」が応答することで決定されている。ヒゼキヤの宗教改革の際には、新しい過越祭の規定は、王と高官たちと「エルサレムの全エクレシア（会衆）」（代下30:2,4）が相談して決定している。会衆からの排除規定について（エズ10:12）も集会にて会衆の応答を持って決定している。

- ⑥**主の契約の民イスラエル＝祭儀礼拝共同体の成員？**（9箇所）；「主のエクレシア（会衆）」から排除される条件の提示されている（申23:2,3,4,4,9; ネヘ13:1; エズ10:8）。また、捕囚からの帰還者の総数を「エクレシア（会衆）の総数」（エズ2:64; Ne 7:66）と表現していることについては、帰還者リストの記載の流れから、帰還者を祭儀礼拝の会衆として数えていると推測できる¹¹⁾。

- ⑦**戦争のための集結集会・武力衝突の場に集まった会衆**（5箇所）；士師記は、対ベニヤミン戦争のためのミツパでの集結を「神の民のエクレシア（集会／会衆）」に加わる（士20:2; 21:5,8）と表現している。これに加わることは「主のもとに集まる／上って来る」と表現されている。また、ダビデとゴリアトの戦いの場には、「エクレシア（集まった者たち）」（サム上17:47）があり、彼らはこの戦いが主の戦いであることを知る、と記されている。加えて、ユダの王アハズの時代の戦争において、兵士たちが將軍たちとすべての「エクレシア（会衆）」の前で捕虜と戦利品を放棄した（代下28:14）出来事が描かれているが、それは主の怒りを意識してのことであつた。この時代の戦争は、完全に世俗的事柄ではなく、むしろ宗教的意味を含んだ描かれ方をしている。

- ⑧**王に対するその国民であるイスラエルの民**（2箇所）；王国分裂の際、まず

「イスラエルの全エクレスシア（すべての人々）」はレハブアム王に交渉に行き（代下10:3）、決裂した。また、アタルヤ政権転覆への活動の初めに、「全エクレスシア（会衆）」がヨアシュを王として認める、という契約を結んでいる（代下23:3）。

- ⑨**民事の事柄の決定や裁判のための集会に集う会衆**（5箇所）：ネヘミヤ記5章では、民事のトラブル解消のために「大きなエクレスシア（集会）」（ネヘ5:7）が開催されている。その最後には祭司の前での誓いと「アーメン」という「エクレスシア（会衆）」の応答と神讃美があった（ネヘ5:17）と描かれているので、宗教的側面も強い。また、ヨブがその中で助けを叫び求めた「エクレスシア（集い）」（ヨブ30:28）も、箴言がその中で「私は追い詰められていた」と語る「エクレスシア（集会）」（箴5:14）も、くじを引き、土地を分ける「主のエクレスシア（集会）」（ミカ2:5）も、民事の事柄解決のための集会であろう。

イスラエル以外の者の集まり／集会

- ⑩**人間一般や非イスラエル人の集まり**（2箇所）：「預言者のエクレスシア（一団）」（サム上19:20）、「悪をなす者のエクレスシア（集い）」（詩26:5）
- ⑪**天上の集会**（1箇所）：「聖なる者のエクレスシア（集い）」（詩89:6）は、「天からの告白」や「神々の子ら」の文脈にあるので、天上の「聖なる者（＝天使たち）の集会」を意味する。

以上から明らかなのは、第一に、七十人訳の「エクレスシア」のほぼ全てが、イスラエルの民の集まり／集会／会衆を意味していることである。用例77箇所のうち、イスラエルの民ではないのは、わずか3（ないし4）箇所¹²⁾のみである。七十人訳の「エクレスシア」は、ほとんど例外なくイスラエルの民に関係している。

第二に、「エクレスシア」の大半は、宗教的集会とその会衆を意味していることである。祭儀・御言葉の礼拝・律法朗読集会の会衆など、明らかに宗教的集会の会衆を指す①～④だけで、全77箇所中44箇所（57%）にも及ぶ。それ自体

は礼拝ではなくとも、祭儀に関わる重要事項決定の集会⑤も加えれば全77箇所中52箇所（68%）になる。それに加えて、⑥に記した「主の会衆」の条件でも、帰還者リストの「会衆の総数」という表現でも、その「会衆」が集うのは祭儀礼拝である。ここまで加えれば、全77箇所中61箇所（79%）に及ぶ。また、⑦の戦争のための「エクレシア」にも宗教的意味が十分に含まれている。

以上より、七十人訳の「エクレシア」の意味の中心は明らかに、祭儀や御言葉中心の礼拝というイスラエルの民の宗教的集会とその会衆であることが確認された。

4. 七十人訳の「エクレシア」と マソラ・テキスト (MT) の「カーハールקהל」

七十人訳のギリシア語「エクレシアἐκκλησία」は、旧約正典の範囲内に77箇所があり、それらはほぼ例外なく、MTのヘブライ語「カーハールקהל」（集会／会衆／集まりの意味）に対応する訳語として用いられている¹³⁾。

ただし、ギリシア語「エクレシア」とヘブライ語「カーハール」は、一対一対応の訳語ではない。MTのヘブライ語の「カーハール」全121箇所中、七十人訳で「エクレシア」と訳されているのは70箇所（58%）だけである。MTには「カーハール」が用いられていながら、「エクレシア」とは訳されていない箇所がかなりある。35箇所（29%）には「シュナゴーゲー συναγωγή」¹⁴⁾が用いられている。

以下に、MTにおけるヘブライ語「カーハールקהל」の出現数¹⁵⁾と、併せて（ ）内に、七十人訳で「エクレシアἐκκλησία」、「シュナゴーゲー συναγωγή」と翻訳されている数をそれぞれ記す：

創4 (0,3) , 出2 (0,2) , レビ5 (0,5) , 民12 (0,12) , 申9 (8,1) , ヨシュ1 (1,0) , 士3 (3,0) , サム上1 (1,0) , 王上6 (4,0) , エレ4 (0,2) , エゼ15 (0,8) , ミカ1 (1,0) , ヨエ1 (1,0) , 詩9 (8,1) , ヨブ1 (1,0) , 箴3 (1,1) , 哀1 (1,0) , エズ5 (5,0) , ネヘ5 (5,0) , 代上7 (7,0) , 代下26 (23,0) ,
= 合計121箇所 (→ἐκκλησία 70箇所、συναγωγή 35箇所)

興味深いのは、各書によってヘブライ語「カーハール」のほぼ全てが七十人訳では「エクレシア」に訳されているものと、全く「エクレシア」が用いられず、大半が「シュナゴーゲー」に訳されているものに傾向が分かれていることである。後者の「カーハール」の用例をみていこう。

創世記～民数記の四書では、MTの「カーハール」に対してギリシア語「エクレシア」は訳語として全く用いられていない。創世記の「カーハール」は4箇所¹⁶⁾ともイスラエルの民ではなく、宗教的意味合いもない。「多くの民の集まり」(創28:3; 48:4)と「諸国民の集まり」(創35:11)の3箇所には、「シュナゴーゲー」が訳語として当てられている。一方、出エジプト記¹⁷⁾、レビ記¹⁸⁾、民数記¹⁹⁾の「カーハール」は全て、イスラエルの民を指しており、全て「シュナゴーゲー」で訳されている。荒れ野を共に旅し、共に生活し、同じ掟を守るイスラエルの民の共同体であり、前の章の七十人訳「エクレシア」の分類①③④⑥に共通している。特にレビ記の5箇所は、明らかに祭儀の文脈である。ただし、「カーハール（会衆）」のための犠牲を…という記述であって、実際にイスラエルの民が祭儀に「会衆」として参加していることを明記した箇所はない。

エゼキエル書では、「カーハール」が「エクレシア」で訳されることはなく、他の書の用例とはかなり異なる意味ばかりであることは興味深い。「カーハール」の用例15箇所²⁰⁾のうち、12箇所は、戦争のための武装「集団」「仲間」「部隊」、2箇所は戦争に負けて沈んだティルス「人々」、1箇所は、戦いに敗れて墓の周りに横たわる「仲間」意味する。全て戦争に関わる文脈にあり、どれもイスラエルの民ではない。宗教的な意味合いは全くない。同じく「エクレシア」で訳されないエレミヤ書では、「カーハール」4箇所²¹⁾のうち、エレ50:9は、戦争のために手を組む「国々の集団」であってイスラエルの民ではない。他の3箇所はイスラエルの民に関係してはいるが、「大集団」(エレ31:8; 44:15)には「大勢」という意味に過ぎない。エレ26:17の「民の全集団」だけは、エレミヤの罪を議論する裁判の会衆で、前章で⑨に分類した意味範囲である。

以上をまとめると、創世記とエゼキエル書の「カーハール」はイスラエルの民以外の人々を指し、七十人訳の「エクレシア」の主な意味範囲から外れてい

る。この2つの書から推測するならば、七十人訳の翻訳者が意図的に「エクレシア」を用いなかった可能性はある。しかし、出エジプト記、レビ記、民数記の「カーハール」は、主の契約の民イスラエルの人々を指している。祭儀の場に会衆として参加していたことの明記はないが、そのような意味の違いを七十人訳の訳者が決定的な違いと判断して意図的に訳し分けたとは考えにくい。

「シュナゴーゲー」は、「会衆／集会／共同体」の意味をもつヘブライ語「エーダー עֵדָה」の主要な訳語であると同時に、「カーハール」の訳語でもある。「エーダー」と「カーハール」は共に「会衆／集会」の意味をもつヘブライ語で、いくつもの用例で同義語として並行な位置などに用いられており²²⁾、そこには意味の違いは見いだせない。MTの「エーダー」は、そのほぼ全てが「シュナゴーゲー」で訳される²³⁾が、MTの「カーハール」は書物によって、「エクレシア」と訳されたり、「シュナゴーゲー」と訳されたりしたと見る方が妥当であろう。

5. 「カーハール」 と 「エーダー עֵדָה」、 「エクレシア」と「シュナゴーゲー」

ここまで記してきたように、「会衆／集会」を意味する主なヘブライ語には、よく同義として用いられる「カーハール」と「エーダー」がある。そして、MTの「エーダー」のほとんどは「シュナゴーゲー」と訳され、MT「カーハール」については、文書によって「エクレシア」か「シュナゴーゲー」のどちらかで訳される。

以下に、MTのヘブライ語「カーハール」と「エーダー」、七十人訳のギリシア語「エクレシア」と「シュナゴーゲー」の出現数の分布を再掲も含めて記しておく；

MTにおける「カーハール קָהָל」の出現数。 その「エクレシア ἐκκλησία」と「シュナゴーゲー συναγωγή」への翻訳数を（）内に併記。

創4 (0,3) , 出2 (0,2) , レビ5 (0,5) , 民12 (0,12) , 申9 (8,1) , ヨシュ1

(1,0) , 士3 (3,0) , サム上1 (1,0) , 王上6 (4,0) , エレ4 (0,2) , エゼ15 (0,8) , ミカ1 (1,0) , ヨエ1 (1,0) , 詩9 (8,1) , ヨブ1 (1,0) , 箴3 (1,1) , 哀1 (1,0) , エズ5 (5,0) , ネヘ5 (5,0) , 代上7 (7,0) , 代下26 (23,0) ,
= 合計121箇所 (→ἐκκλησία 70箇所、συναγωγή 35箇所)

MTにおける「エーダー אֵדָר」出現数²⁴⁾。その「シュナゴーゲー συναγωγή」への翻訳数 () 内に併記。

出15 (15)、レビ12 (12)、民83 (74)、ヨシュ13 (13)、士5 (5)、王上2 (2)、エレ2 (0)、ミカ1 (1)、ホセ1 (0)、詩10 (9)、ヨブ2 (0)、箴1 (1)、代下1 (1)
= 合計148箇所 (→ἐκκλησία 0箇所、συναγωγή 132箇所)

七十人訳聖書の「エクレスΙΑ ἐκκλησία」出現数

申9, ヨシュ1, 士3, サム上2, 王上4, ミカ1, ヨエ1, 詩10, ヨブ1, 箴1, 哀1, エズ5, ネヘ6, 代上8, 代下24
= 合計77箇所

七十人訳聖書の「シュナゴーゲー συναγωγή」出現数²⁵⁾

創4, 出20, レビ20, 民89, 申2, ヨシュ14, 士5, 王上3, イザ5, エレ6, エゼ10, ダニ5, オバ1, ゼファ1, ゼカ1, 詩12, ヨブ1, 箴2, 代下1
= 合計202箇所

これから分かるのは、第一には、類似の意味をもつヘブライ語「カーハール」と「エーダー」のMTでの分布が、書物によって偏りがあることである。「エーダー」は、民数記に特に多く、出エジプト記、レビ記、民数記の3書に全体の74% (148箇所中110箇所) が分布している。申命記には無く、歴代誌の歴史文書にも1箇所にしかない。一方、「カーハール」の分布は、五書では申命記のみであり、歴代誌の歴史文書に56% (77箇所中43箇所) が分布している。

「エーダー」は古くからの伝承に多く、「カーハール」は後期の文書に多いようである。

第二に、ギリシア語の訳語との対応を見ると、MTの「エーダー」に対しては基本的に「シュナゴーゲー」が用いられ、「カーハール」に対しては、創世記～民数記の四書、及びエレミヤ書、エゼキエル書では「シュナゴーゲー」、それ以外では基本的に「エクレシア」が用いられているとまとめることができる。LXX訳の翻訳者たちが「エクレシア」という語を意図的訳し分けに用いたかどうかははっきりしないが、書物による使用の偏りは明らかである。それ故、少なくとも結果的に、旧約聖書の「エクレシア」の意味範囲は、その偏在する用例から導き出されることになる。

五書の中では、「エクレシア」は申命記だけに用いられている。申命記には、イスラエルの民が皆で集まり、宗教的集会の会衆としてモーセの最後の説教を聞く場面が描かれ、御言葉に集中することが説かれているので、申命記の「カーハール」＝「エクレシア」は、御言葉を聞く集会の会衆の意味を強く持っている。

ヨシュア記でただ1箇所の「エクレシア（会衆）」（ヨシュ 8:35）は、エバル山での律法朗読の集会に集って、ヨシュアが読み上げたすべての言葉を聞いたイスラエルの民を指している。土地取得の旅を共にしている同じイスラエルの民について、ヨシュア記ではこの1箇所以外はすべて「シュナゴーゲー（会衆）」と表現されている。律法朗読集会の会衆に対してだけ「エクレシア」が宛てられているのだが、これは、七十人訳翻訳者の意図の反映とは言えない。MTに13箇所ある「エーダー」はすべて「シュナゴーゲー」へ、ただ1箇所の「カーハール」がただ1箇所の「エクレシア」へと、それぞれ対応する訳語へと変換されただけであろう。MTのヨシュ 8:35にだけ「カーハール」が用いられている理由については、ヨシュ 8:30-35が申命記的付加であることで説明可能である²⁶⁾。1箇所の「カーハール」は、申命記的付加部分の申命記的言葉遣いであるにすぎない。翻訳者の意図はおそらく無かったと思われる。にもかかわらず、ヨシュア記では、御言葉の礼拝の会衆にあたるイスラエルの民だけが「エクレ

シア」と記されている。

歴代誌の歴史書は、神殿祭儀を中心に語るイスラエルの歴史、神殿再建、神殿祭儀の復興を描いている。歴代誌の歴史書は、イスラエルを「エーダー」ではなく「カーハール」で語る。「エクレシア」は、その「カーハール」に対応する訳語として多数用いられているだけであろう。しかし、歴代誌の歴史が神殿祭儀を中心に語る書であるので、「カーハール」＝「エクレシア」は、実際の祭儀礼拝の会衆の意味しているのである。

詩編の「エクレシア」と「シュナゴーゲー」の用いられ方は非常に興味深い。詩編の「エクレシア」10箇所²⁷⁾中9箇所が、主を賛美する礼拝を指していることは興味深い。「エクレシア（集会）」の中での主の賛美が呼びかけられている。一方、「シュナゴーゲー」12箇所²⁸⁾で主への礼拝の意味で用いられているのは2箇所²⁹⁾だけであり、大部分は、イスラエルではなくその敵の「群れ」や悪い者の「仲間」の意味で用いられている。詩編では、基本的に「カーハール」が「エクレシア」に、「エーダー」が「シュナゴーゲー」に翻訳されたことによって、少なくとも結果的に、「エクレシア」の大半が主を賛美する礼拝を指す語として用いられていると言えるだろう。

以上のように、MTでのヘブライ語「カーハール」と「エーダー」の分布と、七十人訳でのギリシア語「エクレシア」と「シュナゴーゲー」の分布を比較検討することによって、旧約聖書が描く「エクレシア」は、祭儀や御言葉の「礼拝」と強く結びついていることが明らかになった。七十人訳の「エクレシア」という語の使用自体に、「礼拝」にこだわる姿勢の意図的顯示があったとは言えないかもしれない。しかし、結果的には、「エクレシア」は、ただ「主の民イスラエル」全般を指すのではなく、「(祭儀) 礼拝とその会衆」の性格を強くもつ「主の民イスラエル」を意味する語だといえる。

6. 結び

新約聖書は、イエス・キリストを信じる自分たちを「エクレシア（教会）」

と表現している。「エクレシア」は、旧約聖書のギリシア語訳（七十人訳）では、祭儀礼拝や、御言葉を受け取る礼拝、主を賛美する礼拝を意味し、そこに集う会衆を意味する言葉である。新約時代の教会は、おそらく七十人訳で旧約聖書を知っていた。少なくともパウロは、旧約聖書を（ヘブライ語でもギリシア語でも）熟知していた。旧約聖書が語る「エクレシア」の性格を、自分たちのアイデンティティーの柱として理解していたのではないだろうか。つまり、教会とは、集って、主の言葉を受け取り、主を賛美する主の民である。本報告では、「エクレシア」という語に注目して旧約聖書全体を追いかけることによって、そのあたりまえのことが確認できた。教会の中心は礼拝である。それが、旧約からキリスト教会が確かに受け継いだ教会の柱である。

（やだ・ようこ）

注

- 1) 本稿は、2024年1月の「教職セミナー」での発題を基に、大幅に修正・加筆したものである。
- 2) 使徒7章（アブラハム～ヨセフ～出エジプト～ダビデ、ソロモン）、ロマ4章、ガラ3-4章（アブラハムの契約）、1コリ10:1-13（出エジプトの救い）、1ペト2:9-10（出エ19章に類似の言い回しで「神の民」）、テト2:14（「民」をと自分のものとする）他。
- 3) 「エクレシア」は新約聖書に、マタ3, 使23, ロマ5, 一コリ22, 二コリ9, ガラ3, エフェ9, フィリ2, コロ4, 一テサ2, ニテサ2, 一テモ3, フィレ1, ヘブ2, ヤコ1, 三ヨハ3, 黙20箇所合計114箇所に出現している。そのうち、使4、ヘブ1の合計5箇所以外はすべて、イエス・キリストを信じる「教会」を意味している。W. F. Moulton, A. S. Geden, H. K. Moulton, *A Concordance to Greek Testament*, (Edinburgh: T&T Clark, 1978), “ἐκκλησία” p.316-p.317.
- 4) H. G. Liddell, R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, Art “ἐκκλησία”, (Oxford: Clarendon Press, 1940); W. Bauer, revised and edited by F. W. Danker, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3ed., (Chicago: The University of Chicago Press, 1957, 1970, 2000), Art. “ἐκκλησία”, p.303-p.304.

- 5) Bauer は、ἐκκλησίαの意味③-b「キリスト者の信仰を共有する人々、共同体、集会、会衆」の説明の中で、「エクレシアという語は明らかに、ギリシア語圏のキリスト者たちの間で、2つの理由で一般に普及するようになった。ヘブライ語聖書のギリシア語訳に出現する用語を使用することを通してイスラエルとの連続性を確認するため。また、特に政治的サークルにおいて、キリスト者たちが治安を乱すグループだという疑惑を鎮めるためである」と記している。W. Bauer, *A Greek-English Lexicon of the New Testament*, Art. “ἐκκλησία”, p.303.
- 6) *ibid.*
- 7) *ibid.*
- 8) 申命記のLXXは、十戒を授かった出19章に相当する場面の叙述（申4:10）に加えて、その場面を思い起こす文脈（申9:10; 18:16）で、その日を「エクレシア（集会）の日に」と記している。ただし、申4:10の「集会の日に」という句は、LXXにはあるが、MTではそれに相当する「カーハル（集会）の日に」は省略されている。また、申9:10の「集会の日に」という句は、一部の写本では省略されている。
- 9) ヘブ2:12のギリシア語と詩22:23のLXXのギリシア語の表現は、動詞1語（「知らせ ἀπαγγεῖλω」か「語り伝え διηγήσομαι」か）以外、全く同一である。
- 10) Rahlfs編集の *Septuaginta* における ἐκκλησίαの用例数は、申9, ヨシュ 1, 士3, サム上2, 王上4, ミカ1, ヨエ1, 詩10, ヨブ1, 箴1, 哀1, エズ5, ネヘ6, 代上8, 代下24=合計77箇所。Hatch and Redpathのコンコーダンス（一部の写本にのみ ἐκκλησίαが用いられている聖書箇所も含めて列挙）に記載されている全79箇所のうち、王上12:3、エゼ32:3,23の3箇所は除いた数である。その3箇所に ἐκκλησίαが見出されるのはアレクサンドリア写本だけであり、他の写本では本文のその部分が省略／全面書き換えとなっていて、ἐκκλησίαはない。七十人訳は、写本によって本文が大きく異なることが少なくないが、本研究では、全体の傾向を掴むことを目的とするため、基本的にはRahlfs編集の七十人訳での用例を数えることとする。E. Hatch and H. A. Redpath, *Concordance to the Septuagint and the Other Greek Versions of the Old Testament (Including the Apocryphal Books)*, Vol.1, p. 433. ed. A. Rahlfs, *Septuaginta, 1d est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, (Württembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1935).
- 11) 帰還者リストの記載の流れは、イスラエルの民の男子の数（2:3-35）、祭司（2:36-39）、レビ人（2:40）、詠唱者（2:41）、門衛（2:42）、神殿に仕える者たち（2:43-58）、家系と血筋がイスラエル出身かどうか不明な者（2:59-60）、家系図

- 不明で祭司職剥奪された者 (2:61-62)、「総督は、祭司が現れるまでは最も聖なるものを食べてはならないと命じた」(2:63)、と続き、明らかに関心は祭儀礼拝の執行にある。その次に、会衆全員の人数の記載が書かれている。
- 12) ⑩⑪のサム上19:20, 詩26:5, 詩89:6の3箇所。あるいは、⑦のサム上17:47を加えれば4箇所。ダビデとゴリアトの戦いの場には、イスラエル人だけでなくペリシテ人もいたであろう。
- 13) 正典範囲の七十人訳の「エクレシア」全77箇所中、70箇所はMTヘブライ語の「カーハール קָהָל」の訳語である。その他の1箇所 (ネヘ5:7) は「קְהָלָהּ」(カーハールの女性形の形)、1箇所 (詩26:12) は「מִקְהָלִים」(動詞「カーハール קָהָל」の分詞の男性複数形)、1箇所 (詩68:27) は「מִקְהָלוֹת」(動詞「カーハール」の分詞の女性複数形)、3箇所 (申4:10; 代上28:2; 代下10:3) は「エクレシア」を含む句が省略あるいは全面的に書き換えられている。「エクレシア」が「カーハール」とは全く別のヘブライ語の訳語に当てられているのは、ただ1箇所 (サム上19:20の預言者の「一団」は、「ラヘカー לְהַקָּה」の訳語) のみである。
- 14) 「シュナゴーゲー」は、主には、「会衆／共同体／集まり」の意味をもつヘブライ語「エーダー עֵדָה」の訳語として用いられるギリシア語である。MTのヘブライ語「エーダー」は148箇所。そのうち七十人訳でギリシア語「シュナゴーゲー」が宛てられているのは132箇所。
- 15) G. Lisowsky, *Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1958), pp.1243-1244.
- 16) 創世記の「カーハール」4箇所。すべて、イスラエルの関係ではない。創28:3; 48:4「多くの民の集まり」と創35:11「諸国民の集まり」には、七十人訳では「シュナゴーゲー」が当てられている。民(複数形)や国民(複数形)の「集まり」とは、民／国民として大きく多様になるということ。宗教的意味も集会の意味もない。創49:6「彼らの謀議に加わるな…彼らの集会に連なるな。」
- 17) 出エジプト記の「カーハール」2箇所。出12:6夕暮れにイスラエルの会衆／共同体全体はそれを屠る。16:3荒れ野に導き出して、この全会衆／共同体を飢えて死なそうとしているのか。
- 18) レビ記の「カーハール」5箇所。これらは宗教的な文脈にある。レビ4:13,14,21「会衆／共同体」のための清めのいけにえ。会衆がその祭儀に出席してはいない。レビ16:17,33の大贖罪日については、宗教的集会と見るべきかもしれない。
- 19) 民数記の「カーハール」11箇所。民10:7; 14:5; 15:15; 16:3,33; 17:12; 19:20; 20:4,6,10,12; 22:4。掟に従う、宿営を共に移動するなど、宗教的意味もあるだろ

うが、礼拝の場面はない。

- 20) エゼキエル書の「カーハール」15箇所。Ez 16:40; 17:17; 23:24,46,47; 26:7; 27:27,34; 32:3,22,23; 38:4,7,13,15。そのうちEz 16:40; 17:17; 23:24,46,47; 26:7; 32:3,22; 38:4,7,13,15の12箇所は、戦争のための武装「集団」「仲間」「部隊」。Ez 27:27,34の2箇所は、戦争で敗れ沈められるティルスの人々の「人々」。Ez 32:23の1箇所は。戦いに敗れて墓の周りに横たわる「仲間」。七十人訳の訳語については、このうち、Ez 26:7; 27:27,34; 32:22; 38:4,7,13,15の8箇所は「シュナゴーゲー」、Ez 16:40; 17:17; 23:24,46,47の5箇所は「オクローン ὄχλον」、Ez 32:3,23の2箇所は、アレクサンドリア写本だけには「エクレシア」と訳されているが、他の写本には「カーハール」に相当する句や文章が省略、大幅変更されている。
- 21) エレミヤ書の「カーハール」4箇所。エレ26:17; 31:8; 44:15; 50:9。エレ50:9は戦争のために手を組む「国々の集団」であってイスラエルの民ではない。他の3箇所はイスラエルの民であるが、エレ31:8の「大なる集団」もエレ44:15の「大集団で立っている女たち」も、大勢という以上の意味にすぎない。エレ26:17の「民の全集団」は、エレミヤの罪を議論する裁判に集ってきていた者たちで、前章で⑨に分類した意味範囲といえる。しかし、礼拝の意味は全くない。
- 22) 例えば、箴5:14エーダー（集会）の中で、カーハール（会衆）の中で、私は追い詰められていた。民16:3エーダー（会衆）全体は、その全員が聖なる者……なぜあなたがたは主のカーハール（会衆）の上で思い上がっているのだ。民14:5モーセとアロンはイスラエル人の全カーハル・エーダー（会衆）の前でひれ伏した。；また、例えば民20章のメリバの水の物語の箇所では、同じ「イスラエルの民共同体」のことを「エーダー（会衆／共同体）」（1,2,8,8,11節）とも「カーハール（会衆）」（4,6,10,12節）とも記している。
- 23) MTの「エーダー」の全用例148箇所中132箇所（89%）で、七十人訳ではギリシア語「シュナゴーゲー」が当てられている。ただし、エーダーの全用例のうち110箇所（74%）が出エジプト記～民数記の3書に集中していることは興味深い。また、MTの「カーハール」の場合は全用例121箇所中、70箇所には「エクレシア」だが、創世記～民数記の22箇所やエゼキエル書8箇所を含む35箇所は「シュナゴーゲー」で訳されている。
- 24) Lisowsky, *Konkordan*, pp.1027-1028.
- 25) E. Hatch and H. A. Redpath, *Concordance to the Septuagint and the Other Greek Versions of the Old Testament (Including the Apocryphal Books)*, Vol.2, pp.1309-1310. ed. A. Rahlfs, *Septuaginta, 1a est Vetus Testamentum graece iuxta LXX*

interpretes, (Württembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1935).

- 26) ヨシュ 8:30-35は、ヨシュア記の他の部分とは内容的にも文学的にもかなり異なっており、申命記27章と密接な関係にあると考えられている。この部分の置かれている位置がMTとLXXで異なっていることも、付加的部分であることを支持している。ヨシュ 8:30-35は、MTでは8:29と9:1の間にあるが、LXXでは、9:2と9:3の間に置かれている。: H. W. ヘルツベルク 『ヨシュア記・士師記・ルツ記』小友聡訳、ATD/NTD聖書註解刊行会、2000年、pp.114-119、他。
- 27) 詩22:23,26; 26:5,12; 35:18; 40:10; 68:27; 89:6; 107:32; 149:1の10箇所。そのうち8箇所は「カーハール」、2箇所（詩26:12; 68:27）は動詞「カーハール」の分詞形のギリシア語訳である。この10箇所のうち9箇所は主を賛美する礼拝を指していることは興味深い。詩22:23エクレシア（集会）の中であなたを賛美しよう。詩22:26大いなるエクレシア（集会）で、私の賛美があなたから出る。詩26:12集会の中で、私は主をたたえよう。詩35:18私は大いなるエクレシア（集会）であなたに感謝を献げ…あなたを賛美します。詩40:10大いなるエクレシア（集会）で私は義を告げ知らせました。詩68:27集会の中で神をたたえ… 詩107:32民のエクレシア（集会）で主を崇めよ…主を賛美せよ。詩149:1主に新しい歌を歌え。忠実な人々のエクレシア（集い）で賛美の歌を。
- 28) 詩7:8; 16:4; 22:17; 40:11; 62:8; 68:31; 74:2; 82:1; 86:14; 106:17,18; 111:1の12箇所。そのうち9箇所は「エーダー」、1箇所は「カーハール」の訳語。
- 29) 詩40:11私はあなたの正義を心の中に秘め置かず、大いなるエクレシア（集会）にあなたの真実と救いを語り（「カーハール」からの訳）、詩111:1ハレルヤ、私は心を尽くして主に感謝をささげる。正しい人々の集い、エクレシア（会衆）の中で。